

「賜物」とゴゴリ

諫 早 勇 一

ナボコフの代表的ロシア語小説『賜物』(Дар, 1937-38, 1952¹⁾)の英訳(The Gift, 1963, M. Scammell が作者の協力の下に行った)によせた作者自身の序の中でナボコフは「第2章はフォードルの文学的成長の過程においてプーシキンへと向かううねりであり、彼の父の動物学的探検を描きだそうとする試みを含んでいる。第3章はゴゴリへと移るが、その本当の中心はジーナに捧げられた愛の詩である²⁾」と記している。この発言は作品の第2章の終わりの「古い住まいから新居までの距離は、どこかロシアで例えれば、プーシキン通りからゴゴリ通りまでとほぼ等しかった」(164、引用は以下 Владимир Набоков, Дар, Ann Arbor, 1975 によりそのページを記す)との記述とあわせてしばしば問題とされてきた。しかし、第2章がプーシキンと直接結びついていることは明らかなのに対し³⁾、第3章がゴゴリとどうかかわっているのかは必ずしも明らかでなく、この問題をめぐる論者の発言も一致しているとは言いがたい。そこで、本稿ではこの問題をめぐるこれまでの発言を整理しながら、いくらか私見を述べてみたい。

まず、最初にとりあげるべきは A. Field の Nabokov: His Life in Art (1967) だろう。ここで Field は「『第2章は・・・プーシキンへと向かううねり』だとするナボコフの主張は正確な叙述だが(この章にはたくさんのプーシキンのものが見られる)、『第3章はゴゴリへと移る』との記述は比喩的に [figuratively — 引用者註] とられるべきだ⁴⁾」と指摘した。そして、この指摘は今なお基本的には当を得ていると考えられる。しかし、比喩的であるにせよ第3章がゴゴリと結びついているとするならそれはいかなる点なのか、さまざまな論者がその問題に答えを与えようとしてきた。中でもその問題に正面から答えようとしたのが、G. M. Hyde だろう。彼は Vladimir Nabokov: America's Russian Novelist (1977) においてこう述べる。

「彼 [フォードル — 引用者註] は新しい下宿に (ジーナの予感に引きつけられて) 移り — ナボコフによれば、プーシキン通りからゴゴリ通りとほぼ同じくらい元の下宿から離れた下宿 —、彼の探究は全く新しい局面に入る。ここで主宰する守護神はもはやプーシキンではなくゴゴリであり、テーマもフォードルの父ではなくロシア・リベラリズムの父ともいえるチェルヌイシェフスキイとなる。小説の文体はよりコミックかつ迂回的で、より幻想的かつ『形而上学的』であると同時に、ベルリン生活の細密画によりグロテスクに関わってくる。かつての父プーシキンはここまで彼

を導いてきたが、これ以上は導けないから、今やゴーゴリが彼の導き手とならねばならない。そして、バロック的なゴーゴリの機知の才は、チェルヌイシェフスキのような一見不似合いな対象に向けられることで、最大限に発揮されるだろう。また同時に、それによってナボコフは唯物論的批評によるゴーゴリの誤解に対して、やんわりと復讐できるだろう。⁵⁾」

ここで Hyde はナボコフの発言を積極的に裏付けようとし、第3章における文体の変化と第4章で扱われるチェルヌイシェフスキの主題にゴーゴリ的なものを見ようとしている。この論は後に見るように何人かの支持をえたが、予め問題点を指摘しておくのも無駄ではあるまい。私見によれば、この論の一番の問題は第3章の性格付けにある。主人公フォードルは確かに第3章でチェルヌイシェフスキ伝執筆を決意するが、それはこの章の終わり近くのことであって、第3章とチェルヌイシェフスキ伝との直接的な結びつきはむしろ希薄だといってよい。第3章はナボコフが英訳への序で記したように「その本当の中心はジーナに捧げられた愛の詩」だと見るべきだろう。実際 A. M. Salehar が指摘したように⁶⁾、この章には一見散文のように見えながらも実は隠れた韻文が3つ潜んでいる。つまり、第3章はゴーゴリ的なコミックでグロテスクな散文小説というよりは、むしろプーシキンの叙情詩に中心を置いた章であり、第3章をもってゴーゴリ的な文体に変化したとの説は受け入れがたい。

しかし、Hyde のこの主張はかなりの具体性を持っているが故に、幾人かの支持を得た。たとえば、D. Rampton は Vladimir Nabokov: A Critical Study of the Novels(1984)の中で、「『ゴーゴリ通り』に住居を構えたという表現でナボコフが何を言おうとしていたのかは、G. M. Hyde によって既に明らかにされている⁷⁾」と断言し、文体の変化、さらにゴーゴリ的機知をチェルヌイシェフスキのような一見不似合いな対象に当てはめたという Hyde の主張をそのまま引用している。とはいえ、以来 Hyde の主張を支持する人々も、必ずしも第3章における文体の変化にはこだわっていないように見え、むしろ第4章における主人公チェルヌイシェフスキの造型にゴーゴリ的なものを見ようとする傾向が強いのではあるまいか。一例を挙げれば、L. Toker は Nabokov: The Mystery of Literary Structures(1989)において、第4章のチェルヌイシェフスキがいかにゴーゴリ的であるかを具体的に説明しようとして、「フォードルの著作 [第4章のチェルヌイシェフスキ伝のこと—引用者註] に描かれたショーウィンドウの絵を調べるチェルヌイシェフスキや彼の禁欲的な学生時代の節約ぶりは、同様にぼんやりとはいえ、ゴーゴリのアカーキイ・アカーキエヴィチを思い出させる⁸⁾」と述べている。確かにネフスキ通りのショーウィンドウの「

詩的な絵」を「よく研究」(250)するチェルヌイシェフスキイは、外套の新調祝いの宴に向かう途中明るい店の窓に飾られた美人の絵を眺める『外套』の主人公アカーキイ・アカーキエヴィチを思い起こさせるし、「月20ルーブルで生活」(246)しようとして食べ物や、日用品を節約するチェルヌイシェフスキイも外套の新調のために涙ぐましい努力をするアカーキイとよく似ている。その意味で Tokerの主張は根拠があるが、ここで語られているのが第4章とゴーゴリとのつながりであることは忘れてはならない。さらに、J. W. Connollyも Nabokov's Early Fiction: Patterns of Self and Other(1992)において Hyde や Tokerを引きながら、フォードルは「チェルヌイシェフスキイを、読者にゴーゴリの小説を思い起こさせるようなイメージで描き⁹⁾」ていると述べているが、その引用する「ニコライ・ガヴリーロヴィチ [チェルヌイシェフスキイ—引用者註] は哀れなゴーゴリの主人公のようなすばやい歩調で飛んでいった」(252)といった箇所を見れば、第4章のチェルヌイシェフスキイとゴーゴリの主人公たちとの類似は疑いがない。結局、Hydeの指摘は第4章のチェルヌイシェフスキイの描出がゴーゴリ的だという意味で現在に引き継がれているが、その過程で本来第3章からの文体の変化であったものが第4章の変化にすりかわっていることは、繰り返すが、注意しておく必要があるだろう。

さて、このように一方においてナボコフの意図は第4章のチェルヌイシェフスキイの描き方がゴーゴリ的だという意味だとする主張があって、かなりの支持を得てきたとしたら、他にはどのような見解があるのだろうか。これほどまとまったものはないが、いくつか引いてみよう。R. B. Salomonは The Gift: Nabokov's Portrait of the Artist(1984)において第2章の終わりの言葉を引きながら、「要するに、フォードルは叙情詩から叙事詩へと、アイロニックなりアリズムとのより直接的な出会いへと旅していく¹⁰⁾」と述べている。叙情詩(lyric)から叙事詩(epic)への移行というより叙情詩から散文小説への移行という方がより正確だと思えるが、このことは当然踏まえておく必要があるだろう。『賜物』という作品は主人公フォードルの芸術家としての成長を主題としているが、第1章では詩人だったフォードルが最後の第5章では恋人ジーナにやがて書くべき小説(それがこの小説『賜物』だったという奇妙な構造をもつが)を打ち明け、小説家フォードルの誕生が予告される。つまり、作品全体が詩人フォードルの小説家への転身を描いているとすれば、そのターニング・ポイントを第3章に求めることは自然なことだろう(既に述べたように、第3章の中心にはジーナに捧げられた隠された詩があるが、これも一見散文の形をとっており、第3章を詩から散文へと向かう道と見ることの妨げにはならない)。「アイロニックなりアリズム」などのようにゴーゴリにいろいろなレッテルを貼る以前に、プーシキン=詩人

のシンボル、ゴゴリ＝散文小説家のシンボルと単純化して考えることも必要ではないだろうか。

さて、次に B. Boydの言も当然見ておかねばならないが、Vladimir Nabokov: The Russian Years(1990)におけるこの一節をめぐる彼の主張はきわめて抽象的にとどまっている。彼は言う。「フォードルはタンネンベルグ通り（と父の生涯に関する著述）からアガメムノン通り（とチェルヌイシェフスキイに関する著述）への自らの転居を、暗示的にもプーシキンからゴゴリへの移行として描いているが、ナボコフはゴゴリの芸術を、瞬時ではあっても人間的以上の何か、『この世ならぬ世界の影が名もなく音もない船の影のように通り過ぎる人間の魂の密かな深部』に訴えかけるために、われわれの人生における十分に人間的とはいえないすべてのものをことさら平面化するものと見なしていた。フォードルがゴゴリのぱちぱちはぜる花火の助けでチェルヌイシェフスキイの生涯を照らしたそうとして、プーシキンの明瞭なサーチライトを捨てたとき、ナボコフはフォードルの芸術を別の次元に移行させることをもくろんでいた。『プーシキンの散文は三次元的だが、ゴゴリのそれは少なくとも四次元的¹¹⁾』なのだから¹²⁾と。ナボコフの『ニコライ・ゴゴリ』からの引用をちりばめたこの論は、比喩的なナボコフの言い回しをさらに比喩的に言い換えただけで説得力に乏しい。私見では、Boyd に関してはこの正面から扱った部分より、『賜物』の冒頭部を論じた箇所の方がはるかに示唆に富むのではなからうか。

『賜物』第1部は主人公フォードルがタンネンベルグ通りの下宿に引っ越してきたちょうどその日に同じ家に引っ越してきたローレンツ夫妻の引っ越しの光景に始まるが、これをゴゴリの『死せる魂』第1部冒頭で主人公チチコフがある町に馬車で到着する場面と比べて Boyd はこう主張する。「『賜物』の最初のページーローレンツ夫妻のトレーラーを引くトラクターの誇張された後車輪とローレンツ夫妻自身の詳細な肖像ーは、ロシア文学における一つの偉大な出来事〔『死せる魂』のことー引用者註〕に対するナボコフの賛辞である。ちょうど小説の最後のページでの『エヴゲーニイ・オネーギン』を模した連がもう一つの出来事に讃歌を捧げているのと同様に¹³⁾」と。この車輪（колесо）をめぐる議論¹⁴⁾はさておき、注目すべきは「ローレンツ夫妻自身の詳細な肖像」だろう。ここで Boyd はナボコフが『ニコライ・ゴゴリ』で詳しく論じた peripheral characters（末梢的登場人物）の概念を借りて『賜物』の冒頭を読み解こうとしている。この概念についてはかつて論じたことがあるが¹⁵⁾、この場に即して簡単に説明すれば、作品中で「あたかも本のなかに留まるかのようにそこに現れ¹⁶⁾」て詳しく叙述されながらも、結局作品中で何らの重要性も獲得することなしに消えていく登場人物のことと言えるだろう。そして、『賜物』

冒頭のこのローレンツ夫妻も確かに似たところがある（彼らはフォードルとジーナを結び合わせる可能性を持ちながら、結局そうした役割を果たすこともなく、フォードルと無縁の人物として消えてしまう）。その意味で Boyd の主張は正しいが、この peripheral characters をゴゴリ的と考えるとき、『賜物』の文体をめぐって従来と全く違った考え方が可能になりはしないだろうか。つまり、『賜物』の文体は第3章においてプーシキンのからゴゴリ的に変化したのではなく、冒頭からゴゴリ的だったということも不可能でなくなるだろう。実際『賜物』における peripheral characters の意識的使用に関しては L.L. Lee も Vladimir Nabokov(1976) において第1章のヤーシャの自殺の場面と第5章のフォードルの日光浴の場面に何気なく登場するシュトックシュマイサーを指摘している¹⁷⁾ ように、作品全体を貫くものと考えられる。結局繰り返しになるが、Hyde が主張するような第3章からの文体的変化を裏付けるものではなく、せいぜい第4章（小説全体の構成で言えば、ここだけが作中人物フォードルによるものとされており、本来他の4つの章と異なってしかるべきもの）に変化が認められるにすぎない。文体面からの解決は必ずしも有効とは言えないだろう。

以上これまでの批評家たちの主要な意見を概観してきたが（旧ソ連の研究はまだこうした細かい箇所をめぐっては行われていないように思われる）、私見を述べる前に『賜物』全体とゴゴリについて今一度整理してみたい。

*

*

*

『賜物』とゴゴリのつながりを網羅的に拾ってみると、それは第3章以前から既に散見されることがわかる。たとえば、第1章にフォードルが靴の修理を頼みにいく場面があるが、隣の家に住む靴屋カナリエンフォーゲルはそれをすげなく断る。「彼は靴屋組合の鉄縁の眼鏡越しに彼を見て、フォードル・コンスタンチノヴィチの靴（*башмаки* ——引用者註）の修理を断ったので、どうやって新しい靴を買おうかと思案しなければならなかった。」（67）ロシア文学のファンならば誰でも、この場面からゴゴリの『外套』でアカーキイ・アカーキエヴィチが仕立屋のペトローヴィチに外套の修理を断られ、本気で新調を考えざるをえなくなった場面を思い出すだろう（引用した *башмаки* も当然アカーキイ・アカーキエヴィチ・バシマチキンとつながっている）。第1章には他にフォードルと彼の尊敬する詩人コンチェーエフとの架空の対話にもゴゴリの名前が登場するが、次に第2章のこの箇所はどうだろうか。フォードルがベルリンをうたった詩にこうある。「ここではすべてがひどく平板で頼りなく、／月はひどく稚拙につくられている。／ハンブルグからわざわざ／ここまで運ばれてくるといのに・・・」（107）ゴゴリ・ファンなら間違いなく『狂人日記』で主

書だ。読書しよう」(202)と語られたあと、出典が明かされないまま次の文が引用されている。『もっと、もっと、できる限り長い間私は異郷の地にとどまろう。たとえば私の思想、私の名前、私の著作がロシアのものであろうとも、この私自身、私のはかない肉体はそこから遠ざかったままだろう。』かつて論じたことがあるが²¹⁾、この箇所は1836年6月28日ロシアを離れてまだ間もないゴーゴリがジュコフスキイにあてた手紙からの引用になっている。そして、その作者を暗示する部分が以下に来る。

「(しかし同時に、スイスで散歩中に、こう書いた人物がウクライナ人の潔癖さと狂信家的憎悪とで、小道を横切るとかけ——『悪魔的動物』——を叩きのめした。)」この記述はナボコフの『ニコライ・ゴーゴリ』第1章の1にある「スイスで彼[ゴーゴリ——引用者註]は陽のあたる山道を行きながら、とかけを叩き殺して楽しい一日を過ごした²²⁾」を当然思い起こさせる。しかし、まだゴーゴリの名前が浮かばない読者のためにナボコフは、少し先にこんな記述を忍び込ませている。「しかし、もう耳をすますのをやめて、ひたすらゴーゴリに専心しようと思つたちょうどその瞬間に、フォードル・コンスタンチノヴィチはすばやく立ち上がると、食堂に入ってしまった。」(202)つまり、この部分では、ゴーゴリに通じた読者なら引用を読んだだけでこれがゴーゴリの手紙とわかるが、そうでない読者も続くかっこがきで大概は想像がつき、さらに一般の読者でも最後にはそれとわかる構成になっている。では、それほど用意周到にゴーゴリを印象づけたのはなぜだろうか。やはり、これはこの部分の重要性を示唆するものと考えてよいだろう。しかし、その割に『賜物』とゴーゴリについて論じる批評家たちがこの部分にほとんど注目してこなかったのは奇妙なことと言わざるをえない。

ただ、『賜物』とゴーゴリという主題で考えを進めていくとき、大概は守護神としてのゴーゴリ(およびプーシキン)、プラス・イメージとしてのゴーゴリに中心が置かれ、この箇所のようにマイナス・イメージとしてのゴーゴリは無視され易かったとは言えるかもしれない。しかし、たとえマイナス・イメージであっても、作者ナボコフがゴーゴリに移行したと指摘する第3章において、いわばここだけに²³⁾ゴーゴリが強調されている事実は無視できない。そして、単純に言えば、この箇所は亡命者の身にあるフォードルが同じく亡命者を気取ったゴーゴリに対して反発を覚える部分と言えるだろう。とかけの話の先はこうなっている。「想像だにできない帰還!体制? そんなものはもうどうでもいい。」20世紀の亡命について語るとき、人はしばしば19世紀の大作家たちも国外で執筆したことに触れて、決して20世紀の亡命者たちが特殊ではなかったと主張し、はなはだしくはロシア文学は亡命文学の歴史だとさえ言われることがある。しかし、ナボコフたち亡命者の多くにとっては、自分たちとツ

ルゲーネフ、ゴゴリらとの同一視はほとんど耐えがたい暴論だった。彼らはたとえ長年異国に身を置いてそこで執筆したとしても、彼らには帰るべき故郷、自らの作品を発表してくれる故郷があった。しかし、自分たちには帰るべき故郷もなければ、自作は故郷では出版される見通しもない。そんな自分の境遇を痛感すればするほど、亡命者を気取ったゴゴリのこの発言は許しがたい、そんな反発がここには明瞭に見て取れる。

だが、もちろんこの反発ゆえに第3章のこの部分以降ゴゴリがネガティブ・イメージに変わったわけではない。たとえ反発をかったとしても、それがきっかけでフォードルの人生に一つの方向性を与えたとしたら、その反発を呼んだゴゴリは新たな導き手と呼べはしないだろうか。私見によれば、その方向性とは作品のテーマと結びついている。第1章、第2章で青年詩人フォードルが扱おうとしたテーマは何だったろうか。第1章の中心は『詩集』（Стихи）と題されたフォードルの詩集で、そこに収められた詩は「そっくり皆一つのテーマ、すなわち幼年時代に捧げられて」（15）いた。第2章は行方不明になった父の最後の探検旅行を、『エルズルム紀行』などを書いた「プーシキンを糧とし、プーシキンを吸い込み」（110）ながら、紀行小説に再構成しようとする試みとその挫折がテーマと言えるだろう。これらの導き手はプーシキンだったと考えられるが、これらはともに自分自身および家族のノスタルジックな過去を扱うものと言ってよい。だが、ゴゴリの亡命者を気取った手紙に反発を覚えて以来、フォードルはテーマとしてのノスタルジックな過去を斥けはじめ、第4章ではチェルヌイシェフスキイという歴史上の人物の生涯を「パロディになるかならないかの境に踏みとどまりながら」（225）書き上げ、第5章では自分とジーナの出会いに至るまでの「運命の仕業に類したもの」（407）を主題に小説を書こうと決意する。とすれば、ゴゴリの手紙がフォードルに与えた影響、方向性とはノスタルジックな過去の主題から、より個々人の数奇な運命に密着した prosaicな主題への転換と言えはしないだろうか。第2章ではプーシキンの『エルズルム紀行』などを読んだことが父の中央アジアへの探検旅行を書くきっかけになったが、第3章でもゴゴリの手紙（ともにプーシキン、ゴゴリの作品の中ではマイナー視されるもの）を読んだことがチェルヌイシェフスキイ伝執筆の一つのきっかけになっている（直接のきっかけはソ連で出たチェスの雑誌でチェルヌイシェフスキイとチェスについての記事を読んだことだが）という平行現象は、この問題を考える上で忘れてはならない。

もちろん、ゴゴリがジュコフスキイにあてた手紙それ自身はノスタルジックな過去とつながっていないが、フォードルはここに見られるゴゴリの愛国者と受難者を気取る態度に反発を覚え、これまでの自らの創作が亡命の身の上のノスタルジックな

美化ととられる危険性に思い至ったのではないだろうか。ゴーゴリの手紙はその後のフォードルの創作の歩みを具体的に決定してはいないが、一定の方向づけをしたと考えられよう。

*

*

*

以上『賜物』第2章から第3章にかけてプーシキンからゴーゴリに移行したという発言の意味について若干考察してきたが、以下簡単にまとめておこう。

まず、Hyde 以来これを文体的変化（「よりコミックかつ迂回的で、より幻想的かつ『形而上学的』」）ととらえる傾向があったが、それには疑問が多い。むしろ、ナボコフが『ニコライ・ゴーゴリ』で指摘した peripheral characters の概念から考えれば、第1章からゴーゴリ的要素は含まれている。文体の変化は第4章に認められるが、これは第4章だけが作中人物フォードルによるものという作品の性格からして当然とも言える。ただ、第3章でチェルヌイシェフスキイ伝執筆を思い立ち、その結果がゴーゴリの『外套』の主人公にも似たチェルヌイシェフスキイの造型につながっているという意味で、ここにゴーゴリの影響を見ることは可能だろう。また、19世紀後半の進歩的批評家でゴーゴリの理解者と言われるチェルヌイシェフスキイが実際にはゴーゴリを理解できなかったことを揶揄する意図で、彼をことさらゴーゴリの登場人物に似せたとも言えるだろう。

次にテーマ的な面だが、「ベルリン生活の細密画によりグロテスクに関わ」ったことを第3章以降の特徴とするのにも賛成しがたい。確かに第3章にはたとえばジーナの勤める事務所の細かい描写があって、本棚を這う南京虫や、そこで働く4人のタイピストのおかしな家庭事情が語られている（212-213）が、特にこの女性たちの家庭事情は第1章でヤーシャのエピソードの後に語られるベルリンでの変わった事件と呼応している（どちらにも「肉屋」が出てくる。「隣人の肉屋」-60-、「父の肉屋を」-213-）ことを忘れてはならない。第3章からグロテスクな風俗描写が現れたと考える根拠は希薄だろう。

結局この問題を考えるとき、主人公フォードルが文学に志す青年としてどのようなジャンルをテーマを選びとっていくのか、その試行錯誤を象徴するものとしてプーシキンを、ゴーゴリを考えるのが最も自然ではなかろうか。第1章でフォードルの『詩集』がプーシキンにならって書かれたとは語られていない。しかし、第1章で尊敬する詩人コンチエーフとの架空の対談のなかで、「プーシキンには触れないでおきましょう。これはわが国の文学の金の宝です」（83）と語られ、第3章で尊敬する父が「詩にはあまり興味を持たなかったが、プーシキンだけは例外視していた」（167）と述べられるのを読むとき、『詩集』の導き手がプーシキンだと考えて少しもおかし

くない。そして、第2章では明らかにプーシキンの『エルズルム紀行』に刺激を受けてフォードルは父の探検旅行を題材とした紀行小説執筆を思いついている。つまり、第1章、第2章はプーシキンを導き手としての叙情詩、紀行小説の企てであり、その素材は自分および家族の過去、繰り返せば、ノスタルジックな過去と言えるだろう。これに対し、フォードルは第3章でゴゴリの手紙を読んだことをきっかけにこうした主題と違うものに目を向け始め、さらにチェスの雑誌でチェルヌイシェフスキイの記事を読んだことにより、チェルヌイシェフスキイを主人公とした伝記的散文小説執筆を決意する。そして、第5章で恋人ジーナに打ち明けた新しい小説は、ベルリンを舞台にこれまでの自分たちをめぐる運命の業を描きたいわば現代小説となるだろう。

こう考えていくとき、プーシキンからゴゴリへの移行とはまず叙情詩、紀行小説から過去それから現代を舞台にした散文小説へというジャンルの変化であり（ゴゴリもウクライナの過去を主な素材としたウクライナものから、ペテルブルグの現代を素材にしたペテルブルグものへと移った）、ついでノスタルジックな過去からより個々人の数奇な運命に密着した prosaic な主題へというテーマの変化だと結論できる。もちろん、このように一般化することには当然矛盾も生じようが、比喩的なナボコフの発言のすべてを窺い知ることもとうてい不可能だろう。以上その謎を解く一つの視点として若干私見を述べさせてもらった。

註

- 1) 周知のように『賜物』は「現代雑記」（Современные записки）連載（1937—38）の際チェルヌイシェフスキイ伝にあたる第4章の掲載が拒絶され、5章全体が刊行されたのは1952年ニューヨークのチーフ出版社からだった。
- 2) Vladimir Nabokov, *The Gift*, New York, 1970, p. 10.
- 3) 以下にも見るように、第2章の中心にあたる行方不明になった父の最後の探検旅行を紀行小説にしようというアイデアを、フォードルはプーシキンの『エルズルム紀行』から得ている。 см. Дар, стр. 110.
- 4) Field, A., *Nabokov: His Life in Art*, Boston, 1967, p. 245.
- 5) Hyde, G.M., *Vladimir Nabokov: America's Russian Novelist*, London, 1977 p. 25.
- 6) cf. Salehar, A.M., *Nabokov's Gift: An Apprenticeship in Creativity*. pp. 70-83. In Proffer, C.R. (ed.), *A book of Things about Nabokov*, Ann Arbor, 1974.

- 7) Rampton, D., Vladimir Nabokov: A Critical Study of the Novels, Cambridge, 1984, p. 95.
- 8) Toker, L., Nabokov: The Mystery of Literary Structures, Ithaca, 1989, p. 165.
- 9) Connolly, J.W., Nabokov's Early Fictions: Patterns of Self and Other, Cambridge, 1992, p. 208.
- 10) Salomon, R.B., The Gift: Nabokov's Portrait of the Artist, p. 194. In Roth, P.A. (ed.) Critical Essays on Vladimir Nabokov, Boston, 1984.
- 11) これらは Vladimir Nabokov, Nikolai Gogol(1944)第5章からの引用。
- 12) Boyd, B., Vladimir Nabokov: The Russian Years, Princeton, 1990, p.460.
- 13) Ibid., p. 466.
- 14) 『賜物』冒頭部にも「異常に肥大した後車輪のついた」(с гипертрофией задних колес -9)とあり、『死せる魂』冒頭部でも農夫たちが「なんて車輪だ(какое колесо!)」と感嘆する(Гоголь, Н.В., Собрание сочинений в 7 томах, Т. 5, Москва, 1978, стр. 7.)。[下線は引用者]
- 15) 拙稿「ゴゴリとナボコフ 夢特有の原理」、「ロシア文学論集」第3号、1979、p. 67 参照。
- 16) Vladimir Nabokov, Nikolai Gogol, New York, 1959, pp. 76-77.
- 17) Lee, L.L., Vladimir Nabokov, Boston, 1976, p. 86.
- 18) Гоголь, Н.В., Собрание сочинений в 7 томах, Том 3, стр. 174.
- 19) 英訳では Fielding(The Gift, p. 266)。なお、モスクワで出た4巻選集の注釈によれば、フィールドという作家もいないでないが、これはフィールドディングを縮めたものだろうという(см, Набоков, В., Собрание сочинений в 4 томах, Т. 3, Москва, 1990, стр. 473.)。
- 20) Там же.
- 21) 拙稿「ロシアの奪還——『賜物』からの出発」、「ロシア文学論集」第1号、1977、p. 9 参照。
- 22) Nikolai Gogol, p. 7.
- 23) 第3章では他にロシア散文とゴゴリについて少し触れた部分もある(226)。